

感性を育む大学教育を

和美 廣喜

大学は居酒屋でもコンビニでもない

最近の学生は可哀想である。親からの限られた仕送りしかないからアルバイトをしなければ生活ができない。ほとんどは、コンビニ・居酒屋などのチェーン店・量販店あるいはパチンコ店などに勤めている。そこでは、安い賃金で夜遅くまで働かされ、奇声をあげて接客することが強要される。学生は労働保険や社会保険の加入の適用を受けないし、学生の間だけの短期間でしかも低賃金であることから、経営者にとっては格好の労働力の供給先となっている。もし日本の経済システムがこのような雇用形態で成り立っているとしたら甚だ不愉快である。

日本の学生に対する支援制度も不十分である。奨学金の返済を免除されるのは極わずかで、大部分の学生には将来大きな「借金」として残ってしまう。外国人留学生に対しては国も企業も手厚い保護政策を講じている。自国に余力がないのに、大学のグローバル化を理由に、外国人を優遇する風潮が、はびこっているのも理解できない。

私の学生時代には、東京の本郷近辺に県が支援する下宿が沢山あった。私は、北海道出身だからそのような施設がなかったけれど、友人の下宿に潜り込んで、先輩や後輩と酒を交わしながら夜遅くまで議論をしたものである。それが社会性や学力を身につけるきっかけとなった。

学生は、いつの時代でも、それぞれ個性的で多様な能力を持ち合せている。教育審議会で教育改革について議論しているが、大学を企業経営と勘違いしている向きもある。学生時代の特権である民主的な生活を阻害するような、がんじがらめの基準を設けてはいけない。大学は居酒屋でもなくコンビニでもないし、学生は、いずれ、厳しい階層社会の中で生きなければならないのだから。

大学は資格取得の予備校ではない

現在の大学の建築学科は、一級建築士の資格を取

得するための予備校のようである。国土交通省からカリキュラムが指定され、全国一律の基準で資格取得に特化した要件で大学を評価する。そして、多くのマニュアル人間を社会に送り出してきた。

教育に関する審議会や審査機関などによって、大学の教育評価が行われている。審査委員はどのように選任されるのかは知る由もないが、ご多分にもれず標準化活動の特有の言語を発し、「教育改革の支援活動」であることを誇張して審査にあたる。この成熟した社会において、政府や非生産的な審査機関による押し付けがましいサービスに困惑している。

東日本大震災で、自衛隊の隊長と原発所長の行動のみが何故か勇気を与えてくれた。外見で人を判断してはいけないけれど、この方々は、星の王子さまの「心で見なきゃ物事はよく見えない」ということが身についている人なのだろう。国家の存続が危うくなるような政府の危機管理への対応やそれを批判して社会不安を助長するだけのマスコミの対応に憤りを感じる。政治家も原子力学者の言葉もむなしく聞こえる。

学生のゼミで、一流の建築家の設計した建築を調査させた(写真上)。指示しなくても、自然とリーダーが現れ、調査計画を作成する。当然、懇親会も必修である(写真下)。その時の学生の伸び伸びとした行動は、講義中には見ることができない。いまの学生は、社会で「Only One」になれる潜在的な能力を持っている。これまでの政府主導の教育体系の押し付けは甚だ迷惑である。

ナショナル・キャピタル

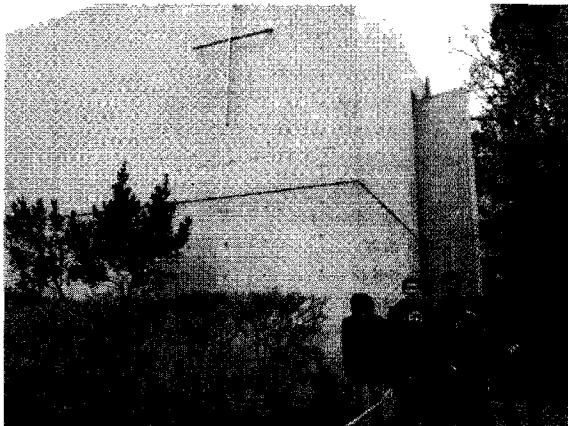
学生は、50年、100年先の国家の形を創造するために、高い志をもって学ばなければならない。我々は、先人の投資によって形成された社会基盤の恩恵を受けて生活している。原子力発電所は取り返しのつかない失態をしてしまった。私は、社会基盤整備などに少なくとも貢献してきたと思うけれど、達成途上の段階で現役を引退することとなった。建築を志す者は、「自らの投資の恩恵を得ることなく、去らなければならないのが常である」ことを認識していると、気が楽になる。

居住水準を満足する住宅は、まだまだ不足してい

る。新幹線や高速道路網は、国内流通はもとより地方の発展のためにも必要である。農林漁業は、食糧確保や国土保全のためにも重要であり、新エネルギーの重要な資源である。伝統・文化の継承やコミュニティの形成なども含め国内の社会基盤整備がまだまだ必要である。

福沢諭吉は「愛国の意あらん者は、官私を問わず先ず自己の独立をはかり、余力あらば他人の独立を助け成すべし」と説いた。グローバル化が進むと、政治・経済・資源・思想のほか規格・基準なども含め、国益の争いが益々多くなるだろう。諭吉の言葉は、特定の塾生だけに与えられたものではないことを認識すべきである。

大学は、グローバル化の名のもとに秋季入学制を導入しようとしている。先進国の学生の多様な年齢構成を見ても、秋入学の必要性は感じない。顧客である学生の意向を無視して、自己を正当化する教員



コンクリート造建築の調査のための合宿



お約束の懇親会

も目立つようになった。秋入学を議論する前に「魅力ある教員・社会に貢献する大学」を目指すことが最優先である。一部の社会性のない教育者によって、先人の築いた伝統や文化を一瞬のうちに崩壊されることがあってはならない。

感性を育む

建築を指向する学生は、「感性を育む」ことが重要である。いまは、あらゆる標準類が整備されている。しかし、同じ工事費の建築であっても、設計・施工に携わる人々によって、その出来栄えが大幅に異なる。これは、そこに携わる人々の感性に依存する部分が大きいからである。

「ものづくり」にあっては、時間・空間、色彩・美しさ・質感・ゆとり・快さなど、標準類では表現できない要素がある。個人の感性は、両親からさずかった遺伝子と、育った環境に影響を受け、幼児期においてある程度形成されるという。しかし、学生は、受験勉強一辺倒の、知識詰め込み型教育の弊害で、少年期における感性の成長が停止した状態で大学に入学してくる。だから、大学教育では、あらゆる現場に足を運び、観て、聴いて、触れるなど、継続して訓練をすることが重要となる。

本田宗一郎は「言葉とか文字では人は動かない」、松下幸之助は「一心不乱」そして、五島慶太は「工事現場の陣頭指揮」を企業理念としてきた。これは企業における管理者教育において、偉大な経営者の率先垂範の言葉として紹介されている。現在の学生教育にもその思想は通ずるものがある。

鉄筋コンクリートは、建設分野の基幹材料である。コンクリートを造ることを知らないで、鉄筋コンクリート部材の破壊性状を体験しないで、卒業していく学生がいるという。鉄筋コンクリートが、建設材料の中で最も「優れたもの」であることを説明できないとしたら、日本の建設業界の将来が危ぶまれる。「ドジャースの戦法を熟読しても長嶋にはなれない」、これが私の教育理念である。

【わみ ひろき／島根大学名誉教授 工博】